

(天声人語) 85%の価値

有料記事

2023年3月5日 5時00分

大勢のろう者が手話でおしゃべりする中に一人でいたことがある。線香花火がはじけるように手や腕が動く。近況を伝えているのか、手話の分からぬこちらは立ち尽くすしかない。世界はぐるりと反転し、「障害者」は自分のほうだった。障害って何だろう▼そんな疑問を思い出したのは、井出安優香(あゆか)さん(当時11)をめぐる損害賠償訴訟の判決を読んだからだ。生まれつき難聴で手話も使っていた。5年前、重機にはねられて亡くなった。裁判では、少女が将来得たはずの収入が争点となった▼ご両親は健常者と同じ額を求めたが、大阪地裁は労働者平均の85%とみなした。わが子の命を数字に置き換えねばならぬ悲しさ、安く算定される悔しさ。ご両親の涙は二つの思いゆえだろう▼判決は、少女に障害があったことを働きにくさの理由とした。でも、働きにくいのは社会にこそ原因がある。障害者が生きづらいのは、世の中が多数派にあわせてつくられているからだ。環境やルールが変われば、「障害」という概念はぐるりと変わる▼絵空事ではない。東京・国立(くにたち)のスターバックスを訪れた。従業員29人のうち聴覚障害者が15人を占め、客は声ではなく指さしや筆談などで注文する。開店から2年以上が過ぎ、すっかり当たり前の光景になっていた▼店員がろう者か聴者か、誰も気にする様子はない。「聴覚障害が労働能力を制限しうる事実であること自体は否定できない」。判決の一節が色あせる未来へ。手がかりは見えている。